日本フランス語フランス文学会

2020 年度秋季大会

2020 年 10 月 24 日（土）・25 日（日）

主催校　福岡大学　〒814-0180 福岡市城南区七隈８丁目１９－１

大会本部：福岡大学人文学部 遠藤文彦研究室

TEL : 092-871-6631 (内線 3626)　FAX : 092-871-6654　MAIL : taikai2020fukudai@gmail.com

■今大会は，オンライン方式で開催します.

■大会参加にあたり，招請状の必要な方は学会事務局までご請求ください.

■委員会・役員会につきましては，学会事務局よりご連絡いたします.

■賛助会員展示は，オンライン会場にて開かれます.

■お問い合わせは，なるべくファックスかメールでお願いします.

大会費　無料

懇親会　大会がオンライン開催のため，開催されません.

第1日　10月24日（土）

幹事会　10：40 - 10：50

役員会　10：50 - 12：00

開会式　12：50 - 13：10

司会　小池 美穂（福岡大学）

開会の辞　桑原 隆行（福岡大学）

開催校代表挨拶　山縣 浩（福岡大学人文学部長）

会長挨拶　石井 洋二郎（中部大学）

研究発表会

第 1 部　13：20 - 14：30

第 2 部　14：50 - 16：00

特別講演　16：15 - 17：45　＊中止となりました

Dominique KALIFA　(Université Paris 1 Panthéon- Sorbonne / Institut Universitaire de France)

La littérature peut-elle "faire époque" ? Le rôle des écrivains dans l'invention des noms du temps

司会：梅澤 礼（富山大学）

第2日　10月25日（日）

ワークショップ第 1 部　10：00 - 12：00

1. 学習者の「なぜ？」に答える、「なぜ？」を引き出す——フランス語教員のための歴史文法
2. 世紀末小説再考——文学とその外部

ワークショップ第 2 部　13：00 - 15：00

3. フランス・ルネサンス文学における五感の問題
4. 文学と歴史（学）の関係を問い直す
5. 分身——その増殖のプロセス

総　会　15：15 - 16：45

議長　和田 光昌（西南学院大学）

閉会式　16：45 - 16：55

会長挨拶　石井 洋二郎（中部大学）

閉会の辞　Hélène de Groote（福岡大学）

日本フランス語フランス文学会 2020 年度秋季大会
研 究 発 表 会 プ ロ グ ラ ム　１０月２４日（土）

	第１セッション（13：20―14：30）＊	第2セッション（14：50―16：00）＊
A	言語学	18 世紀
	司会：大久保 朝憲（関西大学） 1.　物語における名詞発話文について――自由話法との関連から 栗原 唯（青山学院大学非常勤講師） 2. Une perspective logico-syntaxique de la causalité et de l'inférence – une étude de *parce que, comme (causal), donc* et *puisque* Christophe Mitchito Darmon (Doctorant à l'Université de Kwansei Gakuin et à l'Université d'Orléans)	司会：森本 淳生（京都大学） 1.　レチフ・ド・ラ・ブルトンヌにおける自己同一性の探究――『パリの夜』を中心に 石田 雄樹（東北大学助教） 司会：井田 尚（青山学院大学） 2.　マリヴォー『偽りの打ち明け話』における偽りの真実、あるいは真実の偽り 山下 裕大（京都大学大学院博士後期課程）
B	19 世紀1-1	19 世紀2-1
	司会：桑原 隆行（福岡大学） 1.　バルザック作品の中のブルターニュ――そのステレオタイプなイメージの示すもの 別役 昌彦（ブレスト大学内ブルターニュ・ケルト研究所協力研究員） 2.　アルフォンス・ドーデ作品における主人公と挿絵表現 鶴岡 彩香（共愛学園前橋国際大学非常勤講師）	司会：和田 光昌（西南学院大学） 1.　科学普及活動家ルイ・フィギエと回転テーブル――『死の明くる日』を中心に 槙野 佳奈子（宇都宮大学助教） 司会：Vincent Teixeira（福岡大学） 2. Portrait d'un Stendhal japonais ジュリー・ブロック（京都工芸繊維大学教授）
C	19 世紀1-2	19 世紀2-2／ 20-21 世紀 2-1
	司会：福田 裕大（近畿大学） 1.　創造の原理としての偶然――アルフレッド・ジャリにおけるクリナメンの意味と展開 佐原 怜（千葉大学非常勤講師） 2.　モノロギストあるいはモノローグの出現と変容――19世紀末のモノローグ流行と作家たち 岡本 夢子（日本学術振興会特別研究員 PD）	司会：原 大地（慶應義塾大学） 1.　『アナトールの墓』における「神性」の問題――マラルメの喪の作業の本質 馬越 洋平（早稲田大学大学院博士課程） 2.　1920 年代におけるジュール・シュペルヴィエルの詩学の展開――『ユーロープ』誌との関わりを中心に 佐藤 園子（国際基督教大学研究員）
D	20-21 世紀1-1	20-21 世紀2-2
	司会：三ツ堀 広一郎（東京工業大学） 1.　『力への詩』の詩学――アンリ・ミショーからピエール・ブーレーズへ 東川 愛（東京都立大学非常勤講師） 2. ロブ＝グリエ『迷路の中で』のエクリチュールとその条件 木村 仁志（筑波大学大学院博士課程）	司会：小黒 昌文（駒澤大学） 1.　〈生〉と響き合う音楽――「スワンの恋」におけるヴァントゥイユの《ソナタ》像 関野 さとみ（一橋大学大学院博士後期課程） 2.　滞日期ポール・クローデルにおける批評と外交の接点――「日本の伝統とフランスの伝統」をめぐって 学谷 亮（日本学術振興会特別研究員）
E	20-21 世紀1-2	20-21 世紀2-3
	司会：中島 淑恵（富山大学） 1.　「愛せない」ヒロインの見えない指向――ルネ・ヴィヴィアンの自伝的小説における「無性愛」 長澤 法幸（日本学術振興会特別研究員） 2.　「文学的身体」とはなにか――コレット『純粋なものと不純なもの』におけるルネ・ヴィヴィアンのポートレート 伊藤 靖浩（東京大学大学院博士後期課程）	司会：Hélène de Groote（福岡大学） 1.　ピエール・メルテンスの小説におけるカフェ表象と「ベルジチュード」――『亡命地』と『王の平和』を中心に 山内 瑛生（東京大学大学院博士後期課程） 司会：笠間 直穂子（國學院大學） 2.　〈少年〉のエクリチュール――マリー・ンディアイ『豊かな未来について』をめぐって 今野 安里紗（筑波大学大学院博士後期課程）
F	20-21 世紀1-3	
	司会：前之園 望（中央大学） 1.　アンドレ・ブルトンにおけるドキュメントの問い――「ありのまま」の記述についての一考察 藤野 志織（京都大学大学院博士後期課程） 2.　マンディアルグ「ダイヤモンド」における秘教主義と結晶体の美学 松原 冬二（京都大学非常勤講師）	

＊　発表は 1 件につき 30 分（発表 25 分＋質疑応答 5 分）です。今回、各分科会の最初の発表の後、10 分間のポーズを設けておりますので、2 番目の発表は分科会開始から 40 分後の開始となります。2 番目の発表の司会者は、開始時刻に十分ご注意ください。

特 別 講 演 会　　１０月２４日（土）　＊中止となりました

特別講演会　１６：１５～１７：４５

司会：梅澤 礼（富山大学）

Dominique KALIFA

(Université Paris 1 Panthéon-Sorbonne / Institut Universitaire de France)

La littérature peut-elle "faire époque" ?
Le rôle des écrivains dans l'invention des noms du temps

Nous ne découpons pas seulement l'histoire en tranches, nous leur donnons également des noms, des noms propres comme « Fin de siècle », « Belle Époque », « Années folles » ou « Trente Glorieuses », des appellations qui possèdent ce pouvoir singulier d'éveiller la mémoire des faits par la seule mention du nom. Ces termes, que les linguistes qualifient de « chrononymes », ne suscitent que depuis peu l'attention des historiens. Ils sont pourtant décisifs car cette opération de désignation est tout sauf insignifiante. Nommer n'est en effet jamais neutre. L'acte est toujours porteur d'intentions ou d'effets. Même réfléchie, la désignation d'une période charrie avec elle tout un imaginaire, une théâtralité, voire une dramaturgie, qui peuvent en gauchir l'historicité propre et donc la signification. Élucider les noms du temps s'avère donc essentiel à qui veut saisir le passé sans anachronisme ni faux-semblants.

Mais qui invente les noms que l'on donne aux périodes historiques ? L'établir constitue un chantier de vaste envergure sur lequel je travaille depuis près de cinq ans. Qui nomme ? Quand et comment ? La plupart des noms du temps passé s'imposent après-coup, souvent très longtemps après la période de référence (comme « Belle Époque » qui n'émerge que dans les années 1940), mais d'autres appellations sont contemporaines du moment qu'elles décrivent, comme « Fin-de-siècle ». Elles n'ont souvent pas d'auteurs attitrés, surgissent de l'air du temps ou s'imposent peu à peu, par convergence ou consensus. Mais la littérature a aussi sa part à jouer et c'est sur ce dernier point que cette communication sera centrée. Quel rôle les poètes ou les romanciers ont-ils joué dans la fixation des principaux chrononymes de la France contemporaine ? L'enquête portera sur les années 1880-1950 et s'attachera à analyser la part prise par la littérature dans l'émergence des principaux noms d'époques qui marquent encore notre compréhension de l'histoire et de la culture françaises.

Quelques références bibliographiques

« Dénommer le siècle. Chrononymes du XIXe siècle », *Revue d'histoire du XIXe siècle,* n° 52, 2016/1.

« Faire époque », *Littérature*, n° 193, 2019.

D. KALIFA, *La Véritable histoire de la Belle Époque*, Paris, Fayard, 2017 (traduction en japonais en cours, Hosei University Press).

D. KALIFA (dir.), *Les Noms d'époque. De Restauration à Années de plomb*, Paris, Gallimard, 2020.

ワークショッププログラム　10月25日（日）

ワークショップ第1部　10：00～12：00

ワークショップ1

学習者の「なぜ？」に答える、「なぜ？」を引き出す――フランス語教員のための歴史文法

コーディネーター・パネリスト：高名 康文（成城大学）

パネリスト：有田豊（立命館大学），片山幹生（大阪市立大学），ヴェスィエール・ジョルジュ（獨協大学）

今回のワークショップ企画者である私たち4名は、フランス語教育に従事する一方で、中世の抒情詩、演劇、宗教などの研究に取り組んでいます。一見、大きくかけ離れているように感じられる《中世研究》と《フランス語教育》ですが、私たちが普段接している現代フランス語の文法や語彙には、様々な歴史的変化が反映されており、歴史文法の知識で説明することができる文法事象や語法などは少なくありません。私たち4名の研究テーマは異なりますが、それぞれ「中世の言語」という点で共通の知識を持っており、それを平素のフランス語の授業の中でどう活かすことができるのかを考えてきました。

学習者の抱く疑問は歴史文法によってすべて説明可能ではありませんし、たとえ説明可能であっても、それをわかりやすく説明するのは容易ではありません。しかしたとえ適切な回答を提示できなくても、語学学習のなかで問いを設定し、教師がその問いに答える姿勢を示すことでアカデミックな知的実践のモデルとなることは重要だと私たちは考えます。

今回、私たちは、国名と前置詞、形容詞が後続するときに不定冠詞複数が de になる理由、アクサン記号の由来と意味、動詞の不規則活用といったトピックについて話す予定ですが、単に「答え」を提示するのではなく、こうした事柄の説明のために私たちがどんなツールを使ってどのようにアプローチしていったかも示したいと考えています。私たちのプレゼンテーションを踏まえ、説明のありかたや歴史文法を語学教育に取り入れる意義について参加者の方々と活発な議論が生まれることを期待しております。

ワークショップ2

世紀末小説再考――文学とその外部

コーディネーター・パネリスト：合田陽祐（山形大学）

パネリスト：實谷総一郎（明治学院大学），鈴木重周（成城大学），辻昌子（大阪市立大学）

モダニズム研究において、ゾラやプルーストの小説が存在感を増す一方、デカダンスという語はほぼ耳にしなくなった。日本ではいわゆる「世紀末」はブームとして消費されたが、フランスでは 1990 年代以降も、既存のイメージやジャンル、流派等の枠にとらわれない形で、世紀末小説の検討が積み重ねられてきた。「象徴主義の小説」研究はその一例といえるが、こうした動向は未紹介のままである。ほかにも、世紀末に発展した心理学、オカルティズムやドイツ哲学の受容、文芸小雑誌などに焦点を当てることで、作家のメジャー／マイナーを相対化させる新しい視点が獲得されつつある。本ワークショップでは、その一端を担うべく、19 世紀末の小説を例に、文学がその外部の言説と切り結んだ関係性を中心に論じていく。

實谷は、実証主義心理学の展開と自然主義文学との相関性を明らかにしたうえで、無意識のテーマが小説において重要になっていく様相を浮かびあがらせる。鈴木は、博識のコント作家として知られるマルセル・シュウォブに着目し、先行する心理主義や自然主義を批判しつつ新たな道を探ろうとした若き世代の小説観を明らかにする。合田は、世紀末小説における病の表象に、T・リボーの病理学からの影響を確認し、『メルキュール』誌の作家を中心に、症例の活用法を検討する。辻は、19 世紀末にジャーナリストとして一線で活躍したジャン・ロランを取りあげ、新聞記事と融合した彼の小説の文体を「噂話の詩学」という観点から考察する。ほかにも、精神、生命、コント、恐怖、観念論、脳と無意識、ジャーナリズム、語りの手法といったキーワードを起点にして、幅広い聴衆に活発な議論を喚起できればと考えている。

ワークショップ第2部　13：00～15：00

ワークショップ3

フランス・ルネサンス文学における五感の問題

コーディネーター・パネリスト：久保田剛史（青山学院大学）

パネリスト：伊藤玄吾（同志社大学）、林千宏（大阪大学）、志々見剛（学習院大学）

五感あるいは感覚表象は、近現代フランス文学研究において頻繁に取り上げられてきたテーマであるが、16 世紀フランス文学研究に関しては、今日にいたるまで考察対象とされることがきわめて少ない。本ワークショップでは、ルネサンス期の社会的事象や文化的要素をも射程に収めつつ、五感が当時の文学的創造力に与えた影響はもちろんのこと、五感による体験や感覚的イメージの描写方法、感覚器官の働きをめぐる論考についても検証したい。

伊藤は、16 世紀の主要な詩論や音楽論さらには具体的な詩・音楽作品の表記法や記譜法の進展の中に、聴覚と視覚の関係性をめぐる古代以来の問題群の継承とその新たな展開を探っていく。

林は、いわゆるプレイヤッド派の詩人たちの作品を中心に取り上げ、そこにみられる「見ること」（視覚性や形象性）の諸相を探る。その際にエンブレムや同時代の絵画、さらに書物のタイポグラフィなどに注目しつつ論じる。

志々見は、ジャン・ド・レリ『ブラジル旅行記』（1578）を対象に、視覚（とりわけ、実見＝オートプシーをめぐる問題）、その他の感覚（とりわけ、諸感覚と記憶の結びつきをめぐる問題）の位置づけを検討する。

久保田は、16 世紀における古代懐疑主義の復興を端緒として、感覚表象をめぐるモンテーニュの認識論的および倫理的考察、さらには『エセー』に見られる感覚的描写について論じる。

ワークショップ４

文学と歴史（学）の関係を問い直す

コーディネーター・パネリスト：小倉 孝誠（慶應義塾大学）
パネリスト：玉田敦子（中部大学）、真野倫平（南山大学）

文学と歴史（学）との関係をどう捉えるかという問題は、旧くて新しい。両者がどちらも語りの構造を有するとして言説上の類似性を指摘する立場であれ、逆に両者の認識論的な差異を強調する立場であれ、作家と歴史家は緊張をはらんだ対話を繰り広げてきた。

社会と歴史を語る文学において、どのような美学とイデオロギーが動員されてきたのか。旧くはアウエルバッハの『ミメーシス』（1949）から、1980 年代のニュー・ヒストリシズムを経て、現代のブルデューと文学社会学に至るまで、文学と歴史の関係性を問いかける潮流は連綿と続いてきた。他方歴史学の領域では、1970 年代以降の「言語論的転回」やリクールの『時間と物語』(1983-85)などを経て、歴史叙述における物語の役割が考察されてきた。社会の大きなうねりに伴って、文学研究が歴史表象の美学をあらためて俎上に載せている現在、文学と歴史（学）の関係を問い直してみたい。

玉田は、古典古代の言語に対するフランス語の優越の証左として利用されていた文学と、キリスト教の摂理に従いながら古典古代に範をとる歴史学の緊張関係を、崇高の概念を手がかりに明らかにすることで、18 世紀の歴史叙述の問題を考える。真野は、イヴァン・ジャブロンカの『歴史は現代文学である』（2012）と『レティシア』（2016）に依拠して、歴史学の新傾向について報告し、従来の文学と歴史学の境界を越えた歴史叙述の理論と実践について考察する。小倉は、ジョナサン・リテルやローラン・ビネら現代作家の作品を読み解き、それに対する歴史家たちの反応を考慮に入れつつ、文学と歴史学が物語をどのように展開し、記憶の問題とどのように対峙しているかを問う。

ワークショップ５

分身――その増殖のプロセス

コーディネーター・パネリスト：阿尾 安泰（九州大学）
パネリスト：相野 毅（佐賀大学）、藤田 尚志（九州産業大学）

分身というのは、月並みな問題のようにも思える。現代においては、文学、芸術のみならず、思想的、社会的問題にもなりうるほか、マンガ、アニメ、ゲームの世界にも見出すことができる。また歴史的に考えても、ナルシスの場合から考えていけば、その射程の広さも感じることができる。それではこの主題は、そうした広がりの中に解消されていくに任せていけばいいのだろうか。

むしろこのテーマをそうした普遍性から離れて、ある種の特殊性の観点から探究してみたい。というのも、分身という問題が、19 世紀以降特に大きな発展を見せていくように思われるからである。歴史的な長いスパンの中に現れる、この不均衡なプロセスに光を当ててみたい。なぜ 19 世紀以降に急速にこの主題が広がっていくのだろうか。

18 世紀後半から 19 世紀、20 世紀そして 21 世紀へと至る流れの中で何が変わったのだろうか。こうした問題はこれまで、文学的な次元から個々のテクストの内的、構造的な分析等を通じてアプローチされることが多かった。確かにそうした方向で研究の深化を図る道もあるだろうが、それに加えて、自己と他なるものが取り結ぶ関係の中にこの問題を広く位置づけながら、従来とは異なる方向にも探究を向けていきたい。意識に関わる哲学的な観点、また可視性の変貌などをめぐる認識論的なアプローチも考えられるだろう。さらに分身という主題体系が作り出す作品群を享受する層の発生を巡る文化論的探求、政治、社会状況の変化の下での新たなメディアの出現という観点からの分析も想定できるかもしれない。

このワークショップにおいては、そうした主題出現の条件、出現をもたらした環境の変容に重点を置いて考えてみたい。

オ ン ラ イ ン 関 連 情 報

Ⅰ: 大会までのご準備

・本大会では、ウェブ会議システム zoom（https://zoom.us）を使用します。あらかじめ、ご使用の PC やタブレット端末等に zoom アプリ（無料版で可）をインストールしていただきますよう、お願い申しあげます（【参考】zoomPC アプリのインストールの方法：https://zoom-japan.net/manual/pc/zoom-pc-app/）。

・分科会発表要旨 PDF は、学会ホームページ（http://www.sjllf.org）にパスワードをかけてアップいたします（10 月上旬予定）。

・開会式、分科会、特別講演、ワークショップ、総会、閉会式、および賛助会員展示会場の zoom ミーティング情報（ミーティング ID、パスコード）、および発表要旨閲覧用のパスワードは、学会事務局より一斉メールでお知らせします（10 月上旬予定）。メールアドレスの登録がお済みでない会員の皆様におかれましては、これを機に事務局へのメールアドレスの登録をお願いいたします（メールアドレス登録：学会ホームページ＞「事務局より」＞「個人会員用　登録情報の変更」）。

・zoom ミーティング情報や発表要旨閲覧用パスワード、さらに分科会発表要旨（電子版）が、会員の皆様のパソコンから外部に流出することのないよう、情報の取り扱いには十分にご注意ください。

・その他、オンライン大会にかかる最新情報は、学会ホームページにアップいたしますので、適宜ご確認ください。

Ⅱ: 大会当日の留意事項

・分科会、特別講演、ワークショップにつきましては、登壇者および司会者以外はビデオオフ、マイクミュートの状態でご参加ください。大会の円滑な運営のためにご協力をお願いいたします。

メモ